

## 【事業実績】

### 1 奈良文化財研究所での ICOM-CC オフサイトミーティングの開催

\*オフサイトミーティング開催日程：令和元年9月5日

\*オフサイトミーティングについての報告・感想：クリスティアネ・ストレクトヴァン ICOM-CC 委員長による ICOM-CC ニュースレター “On Board” Volume 18, December 2019 における報告より（原文は英文、ここには和訳文のみ掲載）

「2011年の津波の後」というのは、ICOM-CC（ICOM 保存国際委員会）にとって重要なテーマの一つであり、2019年に開催される ICOM 京都大会では、このテーマに焦点を当てていくことが計画されていた。そのため、津波による被災資料の処置に重要な役割を果たしてきた奈良文化財研究所を、オフサイトミーティングで訪れる機会が得られたのは、ICOM-CC にとっては大変喜ばしいことであった。参加申込は早々に定員に達し、オフサイト当日、45名の参加者はバスに乗って京都から奈良に向かうこととなった。奈良に着くとまず、平城京跡資料館を見学した。ここでは、日本の史跡がどのように一般に紹介、解説されているかを知ることができた。

“奈文研”、すなわち奈良文化財研究所では、松村恵司研究所長および高妻洋成埋蔵文化財センター長からの挨拶を受けた後、庄田慎矢国際遺跡研究室長より“奈文研”についての概要説明を受けた。本研究所は、考古学調査などを地域行政の職員とともに実施するセンター的役割を果たしているということであった。その後、保存修復科学研究室の中島志保アソシエイトフェローからは、2011年の津波による被害を受けた文書資料のレスキュー作業についての説明を受けた。資料を凍結させることで、資料の腐敗をいかに食い止めるかということや、凍結乾燥やクリーニング処置、そして最終的な保存・修復作業について説明を受けた。こうした概要説明に続き、非常に興味深い研究所視察が行われた。埋蔵文化財センター内の、文字の書かれた何千もの木簡を含む出土木材を扱う研究室や、陶磁器、金属、そして瓦を扱うそれぞれの研究室を見学した。その他、巨大な真空凍結乾燥器、文化財に直接ラベリングできるレーザープリンターの視察、保存修復科学の専門家や年輪年代学の専門家と意見交換、また環境考古学研究室視察なども行われた。予定していた2時間はあっという間に過ぎていったが、素晴らしい案内のせいもあり、魅力的な新しい事物、興味深い器具類、そして“奈文研”のスタッフとの活発な意見交換などから、離れることができなかった。



奈良文化財研究所視察前に訪問した「平城京跡資料館」の見学の様子



奈良文化財研究所のセミナー室で、研究所の活動の説明を受ける



奈良文化財研究所スタッフからの説明を熱心に聞く参加者



津波による被害を受けた水損文書資料の凍結乾燥処理に使用された真空凍結乾燥器の説明を受ける



施設見学で、出土木材を扱う研究室での説明に聞き入る参加者



施設見学で、実際に行われている資料整理を視察しているようす

## 2 ICOM-CC メンバーによるポストカンファレンスミーティングの開催

\*ポストカンファレンスミーティング開催日程：令和元年9月8日～11日

\*視察先 9月8日 福島県文化財センター白河館“まほろん”  
9月9日 東北歴史博物館、リアス・アーク美術館  
9月10日 陸前高田市立博物館  
9月11日 岩手県立博物館

\*それぞれの視察先でのようすおよび参加者の感想（参加者の感想については作成した報告書より転載、原文は英文であるがここには和訳文のみ掲載）

### 福島県文化財センター白河館“まほろん”



東日本大震災発災時から現在に至るまでの文化財レスキューおよび保存・修復活動に関わるレクチャーのようす



施設内に設けられた仮収蔵庫内で、収蔵庫内の環境や使用されている資材等について出された多くの質問に一つ一つ丁寧に答えるスタッフ



施設内見学のようす



常設展示室見学のようす

\*福島県文化財センター白河館“まほろん”視察にあたっての参加者の感想・意見

「博物館スタッフによる歓待も、今回の訪問のために用意されたプログラムも、感動的で心温まるものでした。本間学芸課長には、2011年3月の地震と津波の影響全般について、さらには、対応にかかった時間や次々に発生する実務レベルの問題などについて分かりやすく解説していただきました。また、福島原子力発電所の事故以降行われている文化財の放射線量のモニタリングをはじめ、文化財のレスキュー活動の複雑さについても説明いただきました。日本政府が震災発生後の20日後にはすでに文化財レスキューの活動計画の実施を決めていたことを知り、驚きました」

「個人的には、ここでの注目すべき点は放射能問題ではないかと考えます（というのも、ツアーで訪れた中で、この問題を課題としてあげていたのはここだけでしたから）」

「どちらかと言えば小規模な施設が、文化財の救出作業によって生じる大きな課題に取り組んでいるのに驚かされました。この博物館にもともと備えられていた耐震構造の収蔵庫を見学できたのは興味深い体験でした。（レスキュー活動のために建てられた）仮収蔵庫は耐震性が低いように見え、残念な気がしました」

「再現模型を含め郷土史を扱うこの魅力的な博物館が持つ地域的な役割の中で、2011年の震災と文化財レスキュー活動について詳しく紹介されていました。このことは、この震災が持つ歴史的広がりをも再認識させるものとして心に響きました」

「屋内外の展示と解説の両方が魅力的で、分かりやすく、退屈することがありませんでした。多くの人に訪れてもらいたい、素晴らしい場所です」

東北歴史博物館



施設の概要や、震災直後のようす、そして文化財レスキュー活動等についてのレクチャーを受ける参加者



施設内見学の様子



資料の保存・修復などに使用されている機材などに強い関心を示す参加者

＊東北歴史博物館視察にあたっての参加者の感想・意見

「この比較的新しい（耐震構造の）建物は、設備が十分に整っているように見えました。保存に対する彼らの方針についての説明や、レッドシダー材が使われた収蔵庫の見学は興味深かったです。電気、水道、ガス、空調が2度にわたって停止したという話にも身につまされるものがありました。インフラはあって当たり前のものであり、私達はそれに完全に頼りきっていますから。停電時（および、その後、湿度と温度が一定に保たれていることが確認されるまで）に収蔵庫を閉鎖したままにすることにした職員の皆さんの決断からも、収蔵庫の緩衝能力の重要性がよく分かります」

「震災後の文化財レスキューに対する同博物館の対応——自館のコレクションを移動させ、他の10の文化施設からの被災資料を受け入れるためのスペースを確保する、というもの——は見事でした。また、非学術系の職員を指揮して、資料の救出作業や、従来と違う業務を遂行させた保存部門の学芸員の管理能力も注目に値します」

「東北歴史博物館の脱酸処理、真空凍結乾燥、記録のための装置、資料の取り扱いや梱包、そして熟練した職員の皆さんの様子を拝見して、とても感心しました。同博物館とその職員の皆さんが2011年に被害を受けた博物館や諸施設の再建計画にも携わっていると聞き、安心しています」

「総じていえば、保存専門学芸員の皆さんが大変な根気強さと誠意をもって、紙資料をはじめとする被災文化財の修復に当たられたことに心打たれました。その作業は非常に感情を揺さぶるものであったに違いありませんから」

「この博物館の訪問を終えて、キーワードを3つあげるとすれば、コミュニケーション、コラボレーション、被災文化財の未来の創造ではないでしょうか」

リアス・アーク美術館



展示の趣旨や、展示されている写真や実物資料についての説明を受ける参加者



スタッフからの説明に熱心に耳を傾ける参加者

＊リアス・アーク美術館視察にあたっての参加者の感想・意見

「被災物、そして地震と津波の直後に取られた数々の写真の展示には、全員が言葉を失いました。山内宏泰学芸員から、詳しい解説と、展示の背後にある論拠を聞いて、感情がさらに揺さぶられました。写真の沈黙の裏側には明確なメッセージが隠されています。それは、このような災害は以前にも起こったことであり、

そしてこれからも起こるのだということ。人類は自然に抗えないのであり、今こそそれを念頭に置いて社会を構築し、住処を定めなければならないということです」

「2011年の震災と、津波による災害の歴史の両方についての常設 (!) 展示は、私にとってドキュメンタリー (写真) と感情 (3Dオブジェクト) の両面で重要な意味を持つものでした」

「展示の背後にある哲学は、津波の歴史をその悲劇と共に明らかにする、というものです。このような歴史は日本ではかならずしも最初に想起されるわけではありません。また、地球物理学的な側面に対応する方策としての都市計画についても。。私にとってこの美術館の訪問は、社会で論議されている博物館の潜在的役割について明確な例を示してくれるものでした。この特殊な事例において、一体どのようにして個人的な観点が組織的な観点へと発展していったのだろうか？」

「明らかに私達は、最も大きな被害を受けた地域に足を踏み入れようとしていました。そこでは博物館の職員の親族の命や家が失われました。そのような状況にあっても、地元や日本の他の地域から多くの人がボランティアで文化財の救出作業に当たったのです」

「同美術館の展示は強烈で、忘れ難い印象を与えるものでした。人類は歴史から学んで初めて生き延びることができるのです——事実や出来事を見て見ぬふりをするのではなく、正面から立ち向かい、責任のある行動を取らなければなりません」

「津波後の写真に特化した常設展示はとても印象的でインパクトのあるものでした。津波によって流された物を有形の記録として使用しているのが大変効果的で、災害の深刻さを想起させるものとなっていました」

## 陸前高田市立博物館



津波により甚大な被害を受けた陸前高田市の現在のようすを見る参加者



陸前高田市立復興まちづくり情報館見学の様子



陸前高田市立博物館で行われている被災文化財の安定化処理作業を熱心に見学する参加者



安定化処理が終わった資料が保管されている収蔵施設内で、施設の環境や保管方法などについて、次々に質問を投げかける参加者



陸前高田市立博物館で行われている被災文化財の安定化処理作業を熱心に見学する参加者

#### \* 陸前高田市立博物館視察にあたっての参加者の感想・意見

「火曜の午前中の体験は衝撃的でした。崩壊した建物、一本だけ残った松の木（奇跡の一本松）、そして新しく建てられたコンクリートの防潮堤といった風景の中をバスで進む中、熊谷氏が津波のこと、その夜をどう過ごしたか、そしてその後の日々と出来事について語ってくれました。公務員としての彼の仕事は、自分自身のことは二の次にして、彼が所属する博物館の安全を確保し、資料を救出すること、そして公共のために尽くすことであったと言います。忘れることのできない話です」

「バスの車中（神庭氏が解説をしてくださいました）と追悼施設のどちらもとても印象的でした。津波の恐ろしさがありありと伝わってきました。ですが、何よりも感動的だったのは、元小学校で聞いた体験談です。心温まる歓迎レセプション（または情報交換会!）によって、この日が特別な1日となりました」

「記憶に残っている具体的な事柄としては、地元の人々の支援（今も行われているのでしょうか?）、津波で流失したデータベース（バックアップは取られていませんでした）と幸運にも保存されていた登録データのハードコピー、しっかりとした取り組み方（それぞれに決まった課題があるように見えました）などがあります」

「強く心に残る博物館と作業施設でした。『失われた』船が、震災の2年後にアメリカのカリフォルニアで高校生達によって発見されたことは、単に震災という側面だけでなく、人間または個人レベルへの影響の大きさを示しているようで、大きなインパクトを与えました。山の中にある施設を訪問したことは特別な体験でした。単に場所がすばらしかっただけでなく、地域全体のために行っている取り組みや仕事を知ることができました」

「私にとって、遠くに1本だけある枯れかけた木を目にし、陸前高田市立博物館があった場所の追悼施設の前に足を止めた時は、まるで地面に飲み込まれるかのようでもあり、ツアーのハイライトの1つでした。大久保館長の話によると、博物館の建物は津波によって10m浸水したそうです。救出された市資料は山の中の小学校に設置された仮施設に保管され続けることになっているようです。話に聞いていたとおり、博物館の保存・修復の専門家たちは新しい手法を試しているようです。そこには、生命は続いていくのだ、という見えないメッセージが隠されているように感じられました」

「博物館のチームはとても熱心に取り組み、自分達の成し遂げたことに誇りを持っていました。彼らは震災から得られた教訓と経験を、未来そして世界にプラスの効果をもたらすものに変えようとしています」

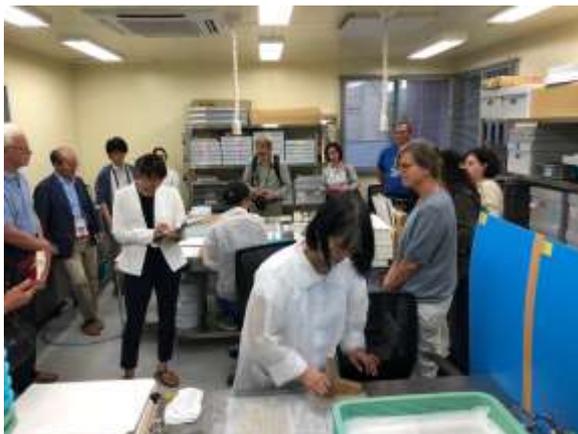
## 岩手県立博物館



安定化処理を待つ資料が収められた施設外の真空冷凍乾燥装置を前に、資料安定化処理の現状説明を受ける



実際に行われている資料の安定化処理作業を食い入るようになっている参加者



安定化処理作業のようすを興味深く見学する参加者



安定化処理の方法等について、質問を投げかける参加者



安定化処理作業の視察の後で、常設展示室を見学する参加者

\*岩手県立博物館視察にあたっての参加者の感想・意見

「あらゆる種類の資料（紙、書籍、金属、陶磁器）に対し、高度な処置と配慮が施されていることに感銘を受けました。何よりの収穫は、中庭にある真空凍結乾燥装置を見学できたことでした」

「ツアーの最後を飾るにふさわしい場所でした。これまですでに多くのことを見聞きしていましたが、今回、さらに踏み込んだやりとりが行えました。そしてもちろん、ここでも、いくつかの試みや、資料の主材質に応じた異なる保存・修復処置を見せてもらいました。この4日間、とても温かい歓迎を受けてきた後に、例えば、西洋絵画の処置の問題などで、今後多少なりとも我々が貢献できることがあるかもしれないと分かったことは、慰めとなりました」

「記憶に残っている課題として、大型の冷蔵庫（代替策は見つかったのでしょうか？）、本のページを一枚一枚サンドイッチ方式で挟んでいっていること（1冊丸ごとで見て、どの程度の効果があるのでしょうか？）、手順や保存・修復作業の紹介の仕方がすでに出来上がったもののように見えたこと（定期的に見学者が訪れているのでしょうか？ また、このような紹介は、どのような層をターゲットとし、何を目的として行っているのでしょうか？）があります」

「最後に、素晴らしい美術品を所蔵する、（地震や津波の）被害を受けていない博物館を訪れ、日本の歴史を学ぶことができたのは嬉しかったです。限られた時間であったにもかかわらず、博物館の若い女性職員が一生懸命に説明してくれました」

#### \*ポストカンファレンスミーティング全体に対する参加者の感想・意見

---

「とても充実した、忘れられない経験になりました。最近では、旅の話が求められたら、このツアーのことをまず最初に話すようにしています」

「初日に聞いた最初の言葉が今も心に残っています。それは、人間が自然を征服することはできない、というものです。自然は、我々が共に生き、尊重し、適応することを学ぶべき対象です。博物館の世界において、私達はお互いからいかに適応し準備するかということ学び、対応し、そして実行するための有用な方法を共有する必要があります。今回訪問した博物館は、互いに助け合いながら、危機に瀕し不安定な状態にある資料に対処しているという最良の見本を示してくれ、――さらには、『社会のための社会的な拠点』としての役目をいかにして実践できるのかについて、さまざまな方法で示してくれました。とても感動的で、ためになる体験でした」

「個人的にも、仕事面でも、ツアーの結果にはとても満足しています。ツアーで出会った全ての人が、丁寧かつ親身な態度で迎えてくれました。多くの人が、業務時間外も含め、多くの時間を割いて、私達に会ってくれました。重要な文化財を個人と施設の両方のレベルで保存していこうという、前向きな姿勢と意志に感銘を受けました。津波後のさまざまなコレクションの状況を考えると、多くの人が希望をなくすのも無理ないことです。絶望的とも思える状況でした。そして今でさえ、全ての資料の修復・保存には多くの作業が必要です。その意味でも、今回出会った皆さんの前向きな姿勢には感銘を受けました」

「今回訪問した全ての施設で、自分達に取り組んでいる仕事・作業について、分かりやすく説明してくれました。いずれの施設でも、手に入る資金・資源を利用して、被災した資料の修復・保存にあたっていました。少ない資金・資源で保存・修復作業をしっかりと行っている人々には、特に感銘を受けました。津波によって、保存の専門家たちは課題を突きつけられ、これまで経験したことのない難問に直面することとなりました」

た。今回、彼らがどうやって新たな方法を見つけ出そうとし、それらをどのように試しているのかを知ることができました。成功したことも、失敗したことも、全て包み隠さず話してくれました」

「もっと詳しく知りたいと思ったことがいくつかありました。修復と保存には入念な計画が必要です。今回のツアーを振り返ったとき、計画についてもっと知りたかったと感じました。津波発生前に何らかの計画があったのか。それらの計画に従うことは可能だったのか。津波発生後の作業の計画と組織化はどのようなものだったのか。将来の危機に向けた備えはどうなっているのか——といったことです」

「2011年に日本が体験したような場面に世界が直面する機会が、今後さらに増えるであろうと考えます。日本の、特に東北地方の博物館や文化的・歴史的施設が、震災の経験から得た知識を共有しようとしてくれていてことに感謝します。また、私達が脆弱な存在であり、私達のコレクションを大切に扱わなければならないということに気づかせてくれたことにも感謝しています。今回のツアーにお力添えいただいた全ての方に心よりお礼申し上げます」

#### \*クリスティアネ・ストレクトヴァン ICOM-CC 委員長によるまとめ

---

ツアーの過程で、日本では、どのような素材や資料の処置が可能であったのか、どのような種類の資料がいまだ問題に直面しているのか、また、どのような面で適切な安定化処置の計画が調査され、開発される必要があるのか、ということが分かっていった。

これは、ICOM-CC (ICOM 保存国際委員会) のネットワークを使えば、日本で進められている優れた取り組みを支援することができる分野である。ICOM-CC は保存に関する専門家達の広大なネットワークを有しており、活発な意見交換がなされている。また ICOM-CC は、同委員会のメンバーと問題を共有する義務があり、その共有は各ワーキンググループのニュースレターあるいはグループミーティングにおいてなされている。また、日本の保存の専門家たちと ICOM-CC のワーキンググループとの間で、対象を絞ったワークショップを共同開催する可能性についても探っていくことが必要であろう。

ICOM-CC ツアーの参加者の中には、我々のコミュニケーションプラットフォーム (ニュースレターや Facebook) や ICOM-CC 大会を通して、ICOM-CC メンバーのネットワーク全体に対し、今回学んだことを共有する者もいるであろう。

災害後の保存・修復についての課題は、地震、火災、洪水、また／あるいは、異常汚染というように、その災害がなんであれ、あらゆる国境を越えた課題である。この課題にいかにしてより幅広く取り組んでいくべきか、——たとえば、2020年に開催される ICOM-CC 大会の本会議とするなど、ICOM-CC の委員会でも議論する予定である。さらに、素材や資料の受けた損害の種類によって、速やかに助言を与えることのできる専門家たちのリストを作成することも極めて重要である。災害発生時には時間が重要な意味を持ち、災害が起こった際には、ICOM-CC としては、効率的に対応できるように努めなければならない。最後に、経験と有益な助言は、記録・整理され、資料の将来的な予防的管理に役立てられるようにしなければならない。

日本の保存専門家たちへは、被災資料に対する保存・修復処置の中で、課題となっている処置等に関して、2020年の ICOM-CC 北京大会のポスター発表において議論できるように、ポスター発表内容の概要を提出するよう提言すべきである。

日本の文化と東北地方で進められている優れた取り組みを知るための私達の旅は、始まったばかりである。  
このツアーで育まれた絆が、対話と協力を通して、地理的境界を越えて続いていくことを心より願っている。

購読のお申し込み

陸前高田市

被災文化財の修復に理解 海外の専門家 市立博物館の取り組み見学 陸前高田（別写真あり）

令和元年9月12日付 3面



▲ 海外の博物館専門家らが市立博物館で行われている被災文化財の修復作業を見学した

ICOM-CC（保存国際委員会）、ICOM（国際博物館会議、本部・フランス）京都大会2019組織委員会などが主催する「ICOM Kyoto 2019 ポストカンファレンスツアーin東北」は8～11日の4日間、東北各地で行われた。10日には、海外の博物館専門家らが陸前高田市矢作町にある仮設の市立博物館（大久保裕明館長）を訪れ、東日本大震災で被災した同市の文化財がどのようにして救出、修復、再生されてきたかを学んだ。

ICOMは、世界138の国と地域から4万4500人の博物館関係者で構成される世界最大の国際的非政府組織で、世界各国の博物館が行う取り組みを伝え、学び合う場として3年に1度大会を開催している。今回の開催地は京都府で、日本では初の

開催となった。

同ツアーは、1～7日に開催された ICOM 京都大会のプログラムの一環。今大会のテーマである「Museums as Cultural Hubs: The Future of Tradition (文化をつなぐミュージアム—伝統を未来へ)」にのっとり、過去から継承した有形無形の文化財の保存と活用の方法を、日本の被災地の博物館での事例などから学ぼうと企画された。

同市を訪れたのは、日本の学芸員やアメリカ、ヨーロッパ各国の博物館専門家ら合わせて19人。市内の復興状況や博物館で行われている文化財の修復作業などを見学した。

市立博物館では、熊谷賢主任学芸員が津波襲来当時の市街地の状況を写真とともに詳しく説明。高田町にあった市立図書館、市立博物館、海と貝のミュージアム、埋蔵文化財収蔵施設のすべてが被災し、約56万点の文化財が津波にのまれたが、全国の博物館や学術機関などの支援を受け、文化財レスキュー活動が展開されたことについて紹介した。

このあと、津波で被災した資料の修復に不可欠な除菌、脱塩などの「安定化处理」の方法を説明。世界でも類を見ない、海水や汚泥をかぶった文化財の保全について、一から処理方法を研究、模索してきたことや、その取り組みが現在も継続して行われていること、また、現段階での処理方法では修復できない文化財があることなどを伝えた。

参加者らは、話を熱心に聞き、質問を投げかけるなどしながら、世界でも前例がない中での修復作業に理解を深めていた。

ツアーに参加した ICOM-CC のクリスティアーナ・ストレットクヴァーン会長(57)は「震災当時の博物館の状況や、文化財レスキュー、安定化处理などの取り組みについて知ることができてよかった」と話し、市立博物館関係者らに感謝を述べた。

大久保館長(62)は「震災から8年が経過し、当時の記憶も風化しつつある中で、被災地を少しでも気にかけてくれる人たちがいてありがたい。現時点では修復が難しい文化財もあるが、陸前高田の歴史を継承するために一つでも多く復旧させたい」と力を込めた。

◀ 前のページへ戻る